

追 悼 文



我が師 平田一成先生

竹 内 直 樹

平田一成先生が令和2年10月15日に逝去されました。近しい人にも知らされることなく、密葬直後のご子息に、知人が別件で電話をしたことから、私たちが知るようになりました。このようなお別れをさびしく思いましたが、いかにも先生らしい人生の仕舞いかたとも思い、先生の心情に思いをいたし納得しました。

平田一成先生は、1956年長崎大学医学部を卒業後、インターンを経て横浜市立大学医学部精神医学教室に入局

その後医局解体等の医学部紛争が全国に広がった時代に、精神科の助教授職を1968年に退職し、愛光病院に勤務

1977年に神奈川県立こども医療センターの初代精神療育部長・精神科部長に着任

1992年日本児童青年精神医学会総会会長を務め、1995年に退職後には小児療育相談センター所長に着任。

平田先生のこども医療センター着任時は、自閉症病棟が設置されていました。しかし数年後、児童精神科病棟に転換したことで、さまざまなニーズに応えることができ、臨床にとっても重要な転機となりました。当時は、「政治の季節」で、県立病院でも労働組合運動が盛んで、ストライキが日常的でした。療育部の職員等にも熱心な活動家でしたが、先生の人柄で実務ではまとまっていきました。机上の空論よりも、臨床のニーズを優先させた結果でもあります。

先生は医局に誰よりも早く出勤し、医局を整頓するのが日課でした。病棟のさまざまな職種にも丁寧に接し、教員、事務職はもとより、薬品会社員等にも、

追悼文

立たせたままの対応は避けて、丁寧な物腰で接しました。その一方で、当時は無礼講のような職員旅行があり、酔いにまかせてダンスに興じたり、カラオケでは「マイウェイ」（岩谷詠）を愛唱し、その中で『だけど私は一度もしていない ただ卑怯な真似だけは』、この歌詞をとくに熱唱していました。

とにかく傲慢で尊大な医者は嫌いでした。「医者は政治や経営、教育等には無知、医者はただの一介の医療の職人に過ぎない」という信念を護り、その人柄の傘で、医局もさまざまな職種の方に支えて頂くことができました。

精神科病棟がこども医療センターに開設された当時は、児童精神医学に偏見がありました。精神病の子どもたちを病院内に徘徊させたら、病院中が混乱するという誤解があった時代です。そのような懸念を解くためにも、病棟内、院内、併設された養護学校の教員、事務職等の交流に、先生ご自身は一生懸命でした。

病棟で毎週行われた症例検討でも、先生は生活史や全体像に関心がありました。子どもの生活圏への関心から、家庭訪問、散歩、買い物外出、入浴介助、プール指導への、若い医者の参加にも寛大でした。

先生は文学や語学にも造詣が深かったのですが、基本的には言葉よりも視覚記憶を重視していました。その才能は看護婦の転勤の挨拶の場面でも発揮されました。数年前の初対面の頃の印象や服装を克明に記憶され、その後の成長を労っていました。

また、診療後に医局の窓辺でカルテを記載しているときは楽しそうで、作家が構想を練るような表情でした。診療録の見事な記載の極意を尋ねると、「診察風景の画像をそのまま言葉に移しかえるだけ」と、答えましたが、ご本人は、「カルテが長々でクドイ、簡潔に端的に描けない」と、しばしば自戒されました。

地域の医療職の連携作りにも熱心でした。

神奈川児童精神医学研究会を作り、これは現在も続いています。専門性の蘊蓄や診断名の差異よりも、個人と個人の率直な連携こそが、とくに患者像の紹介には有益と考えていました。

その後もさまざまな研究会を主宰しました。

定席は前列の端でした。75歳で現役を退いた後も、熱心に参加していました。しかし近年は、「ちっとも患者像がわかりませんでしたね」、これが会の後の口癖で、やがて寡言になっていきました。新学説の流行とは距離をもち、恩師猪瀬先生の学会での姿勢、その伝承こそが責務と考えていたようです。

横浜市内の子ども関連の多職種が「お互いに知り合うこと」を目的に発足した「医療、教育、福祉の会」という多職種の集まりを、岩田敦子先生（初代横浜市大小児精神神経科科長）とお二人で牽引されていた頃を懐かしく思い出します。この会も70年代から現在まで連綿と続いていることをありがたく思います。先生は研究会後の懇親会にも積極的に参加されていました。

最近の医学では、「エビデンス」や「マニュアル」が趨勢になっていき、「年寄りになり、耳が遠くなりました」、「症例が浮かびません」と立腹されて初めて途中退席をした会が、先生の最後の参加になりました。

葬儀にまつわる平田先生の印象深い場面を思い出します。

先生の恩師猪瀬正名誉教授の葬儀のときでした。先生は微動だにせず受付に立ち続けていました。ご焼香をと齋場へ促しても、「私はここで、ひとりでお別れさせていただきます」と、小声ですが毅然とした口調でした。世俗的な葬儀とは離れて、恩師と一人だけでお別れをしているようでした。

「インターンのときに、猪瀬先生に出会えたことが全てでした」と、人物の評を論理ではなく直観で把握し、その後は逡巡しない一途さがありました。

私にとっては平田一成先生が、恩師であり、「心の師」です。多くの教えを授かりました。この僥倖をありがたく思っています。

機会があれば先生に教えて頂いたことを、これからもお伝えできればと思います。

（開花館クリニック 昭和50年卒）